

シベリアを東奔西走した 一軍医の青春

石川県 宮村 利雄

昭和二十年春、旧制金沢医大を出た私が見習士官として赴任したのは、朝鮮平壤の第二陸軍病院であった。

「若い者が来た」と古参軍医連は大喜び。超満員の患者で、当直の夜など寝る間もなかったが、充実した日々であった。

間もなく近くの砲兵連隊付となったが、重火器部隊とは名ばかりで、お粗末な山砲が数門あるだけであった。

八月十五日、玉音放送を聴いて意気消沈。九月二日にはソ連軍がやってきて、将校は屋根だけの周りに囲いのない建物で山中に隔離された。興南から船に乗せられ、十一月二日に上陸した所は、ソ連領沿海州の最南端クラスキノであった。そこには五百人ほども収容

できる緑色の大大テントが数個並び、米国製の新品と分かったが、付近を走り回る軍用トラックもアメリカ製で、米国の強大さを思い知らされた。

十一月末から千名単位の大隊に編成された日本人の貨車輸送が始まり、私も衛生部員八名だけの一車両に入れられて、一カ月の旅路についた。毎日、他の貨車を見回って患者の有無を調べたが、時々ソ連の軍医からパンの特配があつて羨ましがられた。

ウラル山脈を越えたのは十二月十七日、目的地のトンボフには二十四日着。郊外のラーダの半地下営舎に収容されて初めて武装解除を受けた。ここには日本人が四千人以上、ドイツ人が四、五百、その他数カ国の人がおり、正に国際ラーゲルの観があった。思わぬ所でドイツ語が役に立ち、和やかな親善の一時もあった。

極東やシベリア地区の日本人が一冬で死亡者が多発したというので、翌二十一年、モスクワからの命令で援助に行くことになった。六十名の衛生部員が三班に分かれ、特別待遇の寝台車で旅をしたという例は他に

なかったであろう。

極東の中心地ハバロフスクに着いて軍医は各地にばらまかれ、私は第二シベリア鉄道の要地、コムソモリスクから東方、樺太方面に向かうムリー地区の僻地、コスクランボに着いた。初めは鉄道工事の大隊の中隊長をさせられ、九月二日、同地の三〇九九病院に移ったが、朝起きてみるともう白一色の雪景色であった。

伝染病棟を担当したが、続々入院してくる下痢患者のために懸命に働いた。ソ連側の女医が長期休暇で留守の間は、二百数十名の患者を抱えて食事時間も惜しい毎日であった。

肝心の薬は、満州から略奪してきた日本のものが主だったが、黒龍江沿岸に多いとされた「アミーバ赤痢」には特効薬がなく、血便の患者を洗腸しながら、ソ連製の「デイスルファン」という薬を用いて、一週間ほど祈るような気持ちで経過を見守っていたことを今思い起こす。

この他の伝染病には腸チフスや流行性出血熱、森林ダニ脳炎があったが、幸い大学時代、病理の石川教授

の講義を聴いていたので、処置については他の軍医よりの確にでき、ソ連の院長から「よくやった」と褒められたことを覚えている。

死亡者の解剖には日ソの医師が立ち会ったが、結果は病歴と共に必ずハバロフスクの本部に送られていたにもかかわらず、今日までソ連側の死者の発表が、いつもいい加減な数字であるのは納得がいかない。遺体は手厚く土葬にされ、墓標に日本語ではっきり書いておいたのだが、いまはほとんど消えているのではないだろうか。数百に及ぶ墓標が建つ小丘の情景は、今も私の脳裏から離れない。

死者の一人に私と同郷の金沢出身者がいた。二十三年六月二十一日、舞鶴に復員して間もなく、その方の家を訪ね、詳細に報告して、御冥福を祈った次第である。